

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）
令和4年度事務職員長期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	掛員
	氏 名	一宮 藍子
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	タイ
	研 修 先 機 関 名	京都大学 ASEAN 拠点
	研 修 期 間	令和4年4月4日～令和5年3月28日
具体的な 研修内容	<p>1. 概要</p> <p>京都大学若手人材海外派遣事業ジョン万プログラムにより、令和4年4月4日から令和5年3月28日までの1年間、タイ・バンコクにある本学 ASEAN 拠点における業務に従事した。ジョン万プログラムで ASEAN 拠点に派遣された職員としては、通算15人目となる。同拠点は平成26年6月に設置され、本学の ASEAN 地域における、戦略的国際共同研究の支援、国際教育関係事業の支援、国際ネットワーク形成・基盤強化、国際危機管理のための活動を行っている。</p> <p>従事した主な業務内容は、総務関係（会議準備・資料作成、拠点スタッフの勤怠管理、出張手続き、車両手配、来訪者対応、HP や Facebook による広報活動、拠点内物品管理等）、経理関係（仮払金の積算・入出金管理・報告、各種契約、立替払い等）、教務関係（留学説明会等でのブース対応やプレゼンテーション、来訪やメール等による留学相談対応、ASEAN 地域における教育関係情報収集・提供等）、その他イベント対応（科学技術博覧会への参加、東南アジアネットワークフォーラムの運営）等である。</p>	
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>(拠点のある BB ビルディング)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(オフィスのエントランス)</p> </div> </div>	

2. ASEAN 拠点運営業務

拠点は、拠点所長、URA (University Research Administrator)、ジョン万職員（当方の在タイ時は1名。令和5年度より2名の派遣が開始。）、現地職員のタイ人スタッフで構成されている。ジョン万職員の具体的な業務内容は、以下のとおりである。

・総務関係

2か月に1度開催された ASEAN 拠点ネットワーク会議では、国際交流課や各部局の会議メンバーの先生方と Zoom ミーティングを行った。この会議においては、会議資料の準備のほか、拠点の活動報告（機関訪問や留学フェア参加等）や、現地の新型コロナウイルス感染症の拡大状況、大麻合法化（令和4年6月～）に関する情報提供等を行った。



（家の近所の大麻入りグミ屋）



（大麻入りコーヒーの自動販売機）

拠点スタッフの勤怠管理については、拠点所長、URA、タイ人スタッフの勤務スケジュールを正確に把握し、遺漏のないよう、適切な勤怠管理を行い、大学本部に速やかに報告する必要がある。

また出張手続きでは、上述の勤怠管理と同様に各スタッフのスケジュールを把握し、旅行代理店とのやりとりや航空券手配、出張者の訪問先の確認、出張先での面会者、出張内容等の詳細情報をとりまとめるうえ、大学本部に報告を行う。ジョン万職員自身の出張有無は問わず、出張関連全般を担当するので、関係者間での密な情報共有が重要である。

車両手配に関しては、バンコクの深刻な交通渋滞を考慮したうえで、タイ人スタッフと相談しながら、適切なスケジュールをたてることが必須であり、1日で複数機関を訪問する場合はなおのこと注意する必要がある。本学関係者が来タイした際の空港送迎、拠点スタッフの他機関訪問等、車を使用するシチュエーションは多くあり、本学東南アジア地域研究研究所バンコク連絡事務所（拠点から徒歩5分）の公用車を使用させていただくか、借り上げタクシーを利用する。



(バンコクの交通渋滞の様子)

・経理関係

ジョン万職員は出納責任者として、大学本部から外国送金される仮払金を管理・執行し、毎月の執行報告を行う必要がある。支出内容はオフィスの賃貸料や光熱水料、通信費、日々の消耗品購入等と様々であり、店舗や銀行窓口にて支払いを行う。現地企業とのやり取りの際は、タイと日本の商慣習の違いを日々体感することとなり、本学の経理ルールに基づいた対応を行うことに苦慮することが多かった。

また、仮払金の執行のみならず、各種契約（オフィスの賃貸借・保険、インターネットの契約等）の更新業務、業者との価格交渉、プランの見直し等も行い、実態に即した契約内容となるよう留意した。

3. イベント対応等

・教務関係

オンラインと対面合わせて、年間14件の留学フェアに参加したほか、現地のインターナショナルスクールからの希望に応じて、本学の大学説明会を実施した。留学フェアにおいては、ジョン万職員とタイ人スタッフで参加をし、ブース出展や質疑応答を行うことはもちろん、フェア参加者向けの英

語でのプレゼンテーションや、タイ語での挨拶やスピーチ等を行った。いずれのフェアでも本学ブースは大盛況であり、Kyoto iUP や奨学金について、また「〇〇を学ぶにはどの研究科を選ぶべきか」等、毎回数多くの質問が飛び交った。



(ブース出展の様子)



(プレゼンテーション)



(京大留学に興味津々の高校生)

留学フェアは、現地の大学主催のものや、タイの名門高校 (KVIS、Mahidol Wittayanusorn School、Triam Udom Suksa School) に向けた iUP セミナー等と様々であるが、1~2 月にかけては、在タイ日本国大使館主催の地方留学フェアが開催された。このフェアは、大使館の一等書記官の地方視察を兼ねて開催されるものであり、当方の在タイ時は、ピサノロック、コンケン、ウボンラチャタニ、ソンクラの 4 都市の高校と大学 10 機関を訪問した。



(在タイ日本国大使館主催・地方留学フェアの集合写真)



(「日本フェア」を同時開催する高校の様子)

・その他のイベント

各種留学フェアのほか、下記イベントへの参加や運営を行った。

① 科学技術博覧会（National Science & Technology Fair 2022）への参加

本イベントは、インパクトアリーナという巨大な展示場で行われ、世界各国の機関が工夫をこらした展示を行う。本学もブースを出展し、部局作成のVR動画を活用しながら、大学のPR活動を行った。本博覧会の参加者のほとんどが学生であり、幼稚園生から高校生に至るまで、大変多くの人々にぎわった。大型バスに乗って学校単位で参加する機関が複数あったほか、親子連れの姿も非常に多かった。京都大学に留学経験のある保護者が、本学のブースを見つけて大変喜ばれるとともに、ご自身の子どもに対し、京大留学時の思い出を嬉しそうに説明する様子も見受けられた。



(開会式には副首相や大臣も参加)



(学生さんと VR ゴーグル作り)



(ブース来訪者への大学紹介)



(親子連れも多数参加)

② 東南アジアネットワークフォーラムの運営

- ・ 第 16 回東南アジアネットワークフォーラム

(令和 4 年 9 月、カンボジア・プノンペン、約 50 名参加)

- ・ 第 17 回東南アジアネットワークフォーラム

(令和 5 年 2 月、タイ・バンコク、約 100 名参加)



(第 17 回東南アジアネットワークフォーラムの集合写真)

本フォーラムは、ASEAN 拠点や現地同窓会、本学担当部局が連携のうえ開催するものであり、ASEAN 地域における喫緊の課題やトレンドをテーマに、学術的な観点から議論が行われる。第 16 回のカンボジア開催時は、

”Carbon Neutral Urban Design and Manufacturing”、第 17 回のタイ開催時は、

”Developing Asian Humanities and Technology for the Future”というテーマに基づき、基調講演やパネルディスカッションが実施された。本イベントの開催にあたっては、現地同窓会とも連携のうえ、ロジ表の作成や会場担当者との打ち合わせ、経理関連、当日運営等を行った。



(左:第16回東南アジアネットワークフォーラムのパネルディスカッション)
(右:カンボジア王立農業大学の学長を表敬訪問)

本学の国際化に対する
研修成果の
活用方法・
フィードバック

1年間のASEAN拠点での勤務を通して学んだこと、強く感じたことは、以下3点である。

1. 「郷に入っては郷に従う」ことの重要性
2. 現地語（タイ語）を学ぶと、世界が一気に広がること
3. 異文化、日本の文化のよいところを掛け合わせることの必要性

1. 「郷に入っては郷に従う」ことの重要性

令和4年4月のタイ渡航時はコロナ禍真っ只中であり、通常であれば実施される事前渡航（前任者との引継ぎや家探し等を行う）がかなわなかった。そのため、タイが一体どういう国なのか想像がつかないことは言うまでもなく、住む家が決まっていない状況下で、ジョン万生活がスタートした。渡航当初のことを思い返せば、不安がなかったといえれば正直嘘になる。しかし、コロナ禍で人との交流が希薄化していた日本での環境から、突然タイの異文化に飛び込むことは非常に刺激をうけるものであり、現地の人々がエネルギーッシュに生きる姿に感化され、渡航してすぐに現地に順応することができた。

この1年間を通して、タイのみならず、ベトナムやカンボジア、シンガポール等、様々なASEANの国々の方と出会う機会を得た。改めて思うのは、「事前に入念な下準備をしなければ」という日本人の感覚だけでは物事は進まず、あくまでもASEAN地域における現地の方々の文化や考え方を最大限に尊重することが重要、ということである。仮に事前の綿密な下調べを行っていたとしても、結局のところ、現地でなにが起こるかは蓋を開けてみるまで分からない。想定外のハプニングが発生する状況を幾度となく経験したが、「郷に入っては郷に従え」のマインドを持つことで、必要以上に慌てることもなく、むしろ冷静に、その状況下でいかに対応するのがベストか、という方向に気持ちを切り替えることができるようになった。

2. 現地語（タイ語）を学ぶと、世界が一気に広がること

拠点のタイ人スタッフは英語が堪能な方で、渡航当初は会話の100%を英語で行っていたが、やはり現地に行ったからにはタイ語が話せるようになりたいという強い思いがあった。そのため、週末にはタイ語レッスン90分コースを毎週受講したり、昼休みにタイ人スタッフのまえてタイ語の日記を音読して、発音や表現をチェックしてもらったほか、普段の買い物やアパートのスタッフとのやりとりはタイ語で行う等、日常生活で可能な限りタイ語を使用するシチュエーションを作った。その結果、最終的にはタイ人スタッフとの会話は80%~90%英語、10%~20%タイ語というところまで行けたのではないかと思う。

当方のタイ語は初級レベルであるものの、タイ語を学んで本当によかったと感じるシチュエーションは数多くある。特に身をもって感じたのは、現地で体調を崩し、40度の発熱で病院にかかることになった時である。タイ人医師の診察が無事終了して安心したのも束の間、いざ帰宅しようとするも駐車場配車スタッフやタクシードライバーは英語が話せなかったため、この時は40度の熱と闘いながらタイ語を振り絞って交渉を行い（タイは日本と異なり、乗車前にドライバーと交渉する必要がある。行先によっては乗車を拒否される。）、やっとの思いで帰宅することができた。フラフラの状態でも帰着き、療養期間分の生活物品をネットスーパーで注文すると、今度は「あなたが注文したこの商品は、ネット上では在庫ありになっているが、実は在庫切れだった。代替品のAかBだとどちらがよいか」と、スーパーの店員から電話がかかり、タイ語での交渉が始まる。手元に注文品が届いたときは、心底ほっとしたことを覚えている。上述のとおり、初級レベルのタイ語スキルではあるが、語学に身を助けられたと強く実感する経験となった。

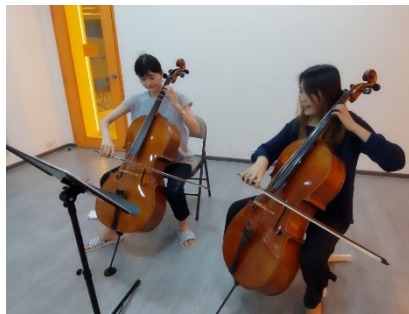
また、タイ語を学習することにより、多くのタイ人の仲間に恵まれたことは最大の財産である。他大学や他機関のタイ人スタッフの皆さんが、日本人である私をタイ人コミュニティにあたたかく迎え入れてくれたこと、仲間として認めてくれたことに対し、感謝の気持ちでいっぱいである。



(タイ人の仲間たち①)



(タイ人の仲間たち②)



(タイ人の先生とのチェロレッスン)

3. 異文化、日本の文化のよいところを掛け合わせることの必要性

育ってきた環境や文化が異なれば、「常識」と思うことに違いがあるのは当然のことである。渡航当初は文化の違いに戸惑うことがあったものの、「タイの大胆さや柔軟さ、日本の正確さや細やかさを掛け合わせて、バランスをとろう」と心掛けるようにすると、非常にやりやすくなった。これはどの国においても言えることであり、国際化が進展するなかで、このバランス感覚を身に着けることは非常に重要であると感じる。

現在、当方は国際交流課海外拠点掛で勤務をしている。上述の1～3で得た経験は、いずれも直接的に日常の仕事に活かせるものであり、そのことを大変嬉しく思うとともに、ASEAN 拠点勤務という貴重なチャンスを与えてくださった関係者の皆様には、心から感謝している。

本学はASEAN 拠点、欧州拠点、北米拠点の3つの全学海外拠点のほか、複数の On-site Laboratory や部局設置の海外拠点等を有している。現地の状況やニーズを把握し、適切なサポートができるよう尽力するとともに、現地で培った国際感覚が鈍らないよう、引き続き様々な方向にアンテナを張って、本学の国際化に貢献したいと考えている。